

上越市議会女性フォーラム記録

- ・日時：8月18日（日）午後1時30分～午後4時20分
- ・場所：高田公園オーレンプラザホール
- ・次第：第1部：基調講演
 - ・講師 谷口 尚子 氏
(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科准教授)
- 第2部：パネルディスカッション
 - ・コーディネーター（講演に引続き、谷口氏）
 - ・パネリスト
 - 佐々木 志津子 氏（見附市議会議長）
 - 池 上 喜美子 氏（長野県上田市議会議員）
 - 今 井 幸 代 氏（田上町議会議員）
 - 武 藤 正 信 （上越市議会議長）

○開会

（主催者挨拶：武藤議長）

- ・本日は、「女性が議員を目指しやすい環境づくり」をテーマとして、市内の各地域の皆様、女性の活躍をサポートしている団体の皆様、県内各市町村議会に御案内をさせていただき、多くの皆様から御来場いただいた。
- ・当上越市議会では、平成28年4月に市議会議員選挙が行われ、女性や若者が極めて少ない状況になった。この結果を受け、平成29年に「市議を目指しやすい環境整備検討会」を立ち上げ、その結果を踏まえた取組の一つとして、このフォーラムを開催した。
- ・講師及びコーディネーターとして谷口准教授をお迎えし、パネリストとして、見附市議会佐々木議長、上田市議会池上議員、田上町今井議員をお迎えした。フォーラムを通して、女性が議員を目指しやすい環境づくりを改めて考えていただければ。

(来賓挨拶：土橋副市長（市長代理）)

- ・市内外から大勢の皆さんに御来場いただいた。心から感謝するとともに、敬意を表したい。
- ・人口減少や少子高齢化がもたらす様々な社会問題に対し、当市だけではなくて、日本中がどうやって取り組んでいくか考えていく時代にある。
- ・「女性が市議を目指しやすい」という、この「女性」の部分で、若者や高齢者、障害をお持ちの方、子育て世代の方と置きかえることにより、それぞれの主体の課題やテーマも変わってくるのだろう。
- ・女性が持つ能力や感性を生かしていくことは当然の課題である。また、様々な主体の皆さんの参画をどのように高めていくか、今日のフォーラムは、その一つの端緒になるのではないか。

○第1部：基調講演

(講師：谷口准教授)

- ・本日の講演では、「日本の地方議会」、「日本の女性の政治参加・意識」、「女性議員を増やすには」この3点のトピックをお話したい。
- ・近年の国政選挙と地方選挙の投票率は、あまり好調とは言えない。地方は投票率が高く、国政は投票率が低いのは、自分達に身近な地域の選挙の方により関心があって、自分達の生活に遠い国の選挙には、あまり関心がないというのがよくある傾向である。
- ・近年、無投票当選が問題視されている。都道府県議会議員選挙と町村議会議員選挙では、特に非都市部で無投票当選の割合が増えている。2割～3割の選挙が無投票当選の状況となっており、「民主主義としてどうなのか」、という課題が指摘されている。
- ・自治体の規模が小さいと女性議員の割合も低く、さらに、年齢も高い傾向にある。議員の成り手不足が生じる自治体において、住民の属性や年齢、性別、職業等、バランスよく代表していくことが難しいという課題が指摘されている。
- ・人口の小さい町村議会では、議員報酬が月額20万円を切る場合があるが、専業で家族を含め生活していくためには、そこの自治体職員くらいの給料が必要となってくる。また、年金制度等の社会保障面がしっかりしないと、議員専業はリスクがある。
- ・総務省が平成29年度に町村議会のあり方に関する研究会を立ち上げ、集中専門型と

多数参画型の2つのタイプの在り方を提案した。集中専門型は、定数をギリギリまで削って専業できるよう報酬等の待遇を改善し、住民にも参画してもらう形。

- ・今まで日本の地方自治の議会は、どこも似たような制度でやってきたが、人口規模や自治体の在り方によって変わってくるため、都道府県議会や政令市議会と変えたらどうかという議論が行われている。新しい議会像が模索されており、地方議会の問題は、関心が持たれている。
- ・日本人の政治意識にどんな特徴があるかと言うと、先進国の中で見ると、政府に対する信頼性が低く、政府は国民の暮らしに責任を持つべきという意見の割合は高い。つまり、政府は信用していないが、責任を持って暮らしは良くして欲しいという、依存的なところがある。
- ・日本人の属性を見ると、70代以上の男性が一番政治の信頼や社会的な貢献意欲が高い。年代が高い方が、政治への信頼や地域への貢献意欲は高いという傾向がある。一方、どの年代においても、女性は男性より低い傾向があるが、10代だけは、女性の方が政治や意欲に関して意識が高いが、その後、結婚などで低くなっている。
- ・日本の国会議員は女性の比率が低く、先進国の中では最下位となっている。しかし、女性の地方議会議員数は増加傾向にある。都市部の議会では、2割から4分の1くらいが女性となっている。一方、町村議会や、都道府県議会でも少しずつ増えてきているが、都市部と比べて差が出ている。
- ・今後の人口減少が指摘されている中、内閣府や人口問題研究所の推計によると、あと二、三十年で人口が1万人を切ってしまう小規模自治体が4割を占めるようになる。特に、2040年までに若い女性が増える自治体は、1,800自治体のうち都市部を中心に15しかない。この中で新潟県は、6割の自治体で若い女性が30年間で半減と推計されている。ここで現状への危機感が生じてくる。
- ・上越市議会では、市議を目指しやすい環境整備検討会では、女性特有の壁を打破する提言がされている。
- ・男女共に意識を改革していくこと、女性が政治参加すること、自分たちの地域の課題に自分たちが関わっていくこと、これらは自然で当たり前のことである。
- ・子どもの頃から地域に関わってもらい、地域への愛着を感じてもらい、また、男女関係なく活動している大人を見させていくことも必要である。

- 政治塾といったもので女性人材を育成していく、子育ての両立や介護支援等のバックアップ体制を整備していく、また、提言されている女性に一定の数を割り当てるクォータ制などをどうやっていくか。
- 最後に、私が関わった埼玉県内の自治体で市民意識アンケートを行った結果から。
- 地域活動の経験や意欲は、テーマ次第で変わってくるのが分かった。年代やライフステージでも、文化やスポーツ、趣味、子育て等の関心が変わってくる。議員に立候補するよりも、まずは自分に関心のあるテーマで、自治体や地域づくり活動に取り組むような仕組みを考えたらどうか。
- 女性の議員を増やすための考え方として、男女や社会全体の意識改革が必要である。小さい時の教育や大人が子どもに対してどのような姿を見せていくかが大事。
- いきなり議員を目指すより、非政治的でも関心のあるテーマに関連して、地域の仕事や自治体の仕事を一緒にやっていくことが政治参加の入口になる。
- 社会的意義も大事だが、楽しみや成長等といった個人的意義を強調することも大事である。
- 時間になったので、ここで私の講演は終わりとさせていただきます。

○第2部：パネルディスカッション

(はじめに各パネラー自己紹介)

(谷口氏)

- ・女性と政治を考える上での体験談、立候補の経緯や動機、背景、選挙や立候補で苦労した点を。

(佐々木氏)

- ・フリーアナウンサーや読み聞かせの活動等をしていた時期に、市議に立候補しないかと町内から話をいただいた。当時は、政治や議会の世界を全く知らなくて、何故自分なのか、と感じた。
- ・娘が思春期の中の立候補は母親としてすごく悩んだが、「チャレンジしてみたら」と子どもたちに背中を押され、立候補を決めた。
- ・立候補に際し、子育て両立、教育、環境、福祉の4つの柱を掲げた。市議に当選したらこんなことをやりたいと訴え、当選し、今6期目20年経過した。
- ・市議になり、ファミリーサポートセンターや子どもの一時預かり、病後児保育等、女性目線での施策が具現化していくことで、立候補を決断して良かったと感じた。
- ・一議員としてではない、議長という立場ではあるが、立候補を決断した時の気持ちを忘れないようにしている。
- ・自分のことを振り返ると、女性が政治の世界に飛び込むことは、社会人である以前に母親でもあるという面で、葛藤が生じると感じている。

(池上氏)

- ・上田市が合併する前、上田市制施行80周年記念事業の一つとして、女性議会が開催された。その一員として、行政の色々な事業の勉強をする中で、政治に興味を持った。
- ・2001年に「子育て応援団ばれっと」を立ち上げ、子育て支援や母親を元気にする活動をしていた頃、公明党所属であった義父が議員を引退となり、公明党から市議に立候補しないかという話をいただき、立候補した。
- ・義父は、女性議員を増やすため立候補して欲しいと考えていたが、姑と夫は、義父が議員の間、世間に気を使っていたこともあり、少し抵抗された。しかし、自身は議員

という使命をいただいたからにはしっかり頑張ろうと、立候補を決意した。

- ・義父が議員時代、地域の中に残してくれた実績があり、すんなりと受け入れてくれた。しかし、これからは自分の味方を作っていかなければならないため、地域行事には顔を出し、現在は地域の中でしっかり認めていただいている。
- ・最初の選挙は、地元や支援団体、自分が関わっている仲間もおり、楽しく行うことが出来た。これまで5回選挙をやってきて、輪が広がったことを実感している。選挙時の苦労は、余り感じることなくやってくることができた。

(今井氏)

- ・政治的な関心を意識して持つようになったのは母親になってから。
- ・政治の世界に踏み入れた理由は、もともと民間会社で仕事をする中、雇用を通じて地域を元気にしたい、変えていきたいという思いがあった。
- ・結婚、出産を経て、母として自分の子が大人になったときに、地域が存続できるのだろうかという不安、危機感を持った。そういった中で、人材育成の底上げをしてかなければ地域の将来性はない、まだまだ地域でやれる教育はあるのではないかと考えるようになった。そして、父が20年町議の引退を考え始めた頃、父が引退をするなら自分が立候補したいと思うようになった。
- ・選挙活動は、会社の先輩や地元の同僚に手伝ってもらい、町内4,200世帯すべてを戸別訪問する中、父の支援者も協力してくれるようになった。娘が1歳だったため、3時間おきぐらいに戻って授乳をして、また選挙活動に戻る、の繰り返しだった。1期目の選挙期間中は、小さい子どもがいる家庭にも配慮し街宣車は出さないなど、従来のみなさんのやり方とは違うやり方をさせてもらった。また、まだ早いのではとの雰囲気も感じた。
- ・昨年、町長選挙に出た際、6ヵ月の子どもを抱えながら選挙活動を行ったこともあった。挨拶先で、自分の子どもをほっといて子育て施策を訴えるな、と怒られることもあった。社会環境の変化に地域の意識が追いついてないことを実感した。
- ・家族のサポートがあったからこそ。選挙に関しては本人よりも家族の苦労の方が多いのではと実感している。

(谷口氏)

- ・上越市議会や近隣地域の議会に立候補を検討している方へアドバイスを。

(佐々木氏)

- ・市の施策には女性目線がとても重要であり、女性目線の施策を反映してもらえるよう、一般質問や提言ができる。自分が議員になったら何をしたいのか、しっかりと明確に打ち立てることが必要。院内保育や病後児保育など、日常生活の中で女性が社会に出やすいような環境を作っていくためには、女性が議会の中で発信していくことが重要。
- ・立候補は悩むと思うが、一途に進んでほしい。20年間議員を経験し、施策が具現化出来たことに対して、女性が議会の中に入っていくことが重要であると感じた。

(池上氏)

- ・自身が当選した際、仲間から、女性の議員が出たことで政治を身近に感じたという声があった。
- ・子育てをするお母さんの声や親子の様子を見ている中で、課題や必要な支援について身をもって感じる事ができた。その課題に対し、仲間たちから提案されたことを一般質問や委員会で提案することで、休日に開設していなかった親子広場の休日開設等、施策の実現につなげることができた。子育てをする母親の声を聞けることは、女性議員のメリットだと思う。

(今井氏)

- ・女性議員が遅くまで仕事をしていると、こんな時間まで仕事をして子供が可哀想と言われる。自分も子どもと一緒に居られないことを申し訳なく思っているにもかかわらず、周りからも言われてしまうと、心に刺さる。
- ・周りが候補者を推薦する場合、その人の環境や家族構成等を理解し、政治活動できるよう配慮すること、サポートすることが重要である。例えば、集まりの時間設定等、家庭と政治活動を両立できるような環境を整えてあげるだけでも全然違うと思う。
- ・議員は世話好きの方が多い。やりがいを個人的な利益と思えなければ議員という仕事はできないと思う。

(谷口氏)

- ・武藤議長が立候補した経緯と、女性に限らず立候補してもらいたい様々な方へのアド

バイスがあれば。

(武藤氏)

- ・立候補の経緯は、地域の意見を発信していた当時の町長が町長選で落選してしまい、自身が発信源となるべく立候補を決意した。しかし、家族からは抵抗された。
- ・立候補を検討されている方は、信念を貫いて出ていただきたい。市内の女性で、以前から市議になりたかったが、家族の了解を得ることができず、立候補を断念してきたという話を聞いたことがある。自分の信念や議員になって何をやりたいのか、目標を持って立候補することが重要である。
- ・初めての選挙活動は、広大な市域を回ることやチラシ作成などで相当のお金がかかる。

(谷口氏)

- ・議会活動で女性議員が抱える困難とそれを克服するための工夫や方法、制度の提案を。

(佐々木氏)

- ・女性議員は、年齢重ねることで家庭環境が変わってくる。以前の議会では、出産を事故としていたが、現在は制度や法律も変わってきた。女性議員を増やすためには、子育てや介護をする女性議員が活動しやすい環境をつくることが重要。議会における女性議員の活動を真剣に考えていく必要があると思う。
- ・女性議員が抱える課題として、子育てや介護、家事等の負担がある。周りが意識を変え、フォローアップがなければ、なかなか女性は社会に出られない。
- ・女性議員を増やし、バランスの良い議会を構成していくためには、意識改革と環境整備、議会の制度を変えていくことが必要。出産を単なる事故扱いではなく長期休暇にしたり、届け出によって休暇が取れるようにしていかなければならない。

(池上氏)

- ・女性議員にとって家事や育児、介護の両立は一つの悩みであるが、ポジティブに考えれば、その経験を社会的課題に変え政策提言をしていくことができる。自分一人の悩みではなく、社会全体の悩みでもあるため、強みになる。
- ・女性に限らず、男性も同様だが、信頼できる相談相手を作ることは大事だと思う。自分自身も、何でも相談できる先輩や友人から助けってもらってきた。
- ・長野県の公明党は、党内で女性議員を出すための工夫やアクションをしており、約 4

割が女性である。そういった意識を持つことが女性議員を増やすことに繋がっていくと思う。

(今井氏)

- ・2期目の妊娠中に切迫早産になり、自宅安静を指示され、約半年間にわたり議会活動ができない状態になった。定例会や委員会に出席できず、罪悪感は非常に大きかった。自宅安静中、自分の代理で採決に参加できる制度があれば、と思った。
- ・そのような中、議会関係者や支援者から無事に出産することだけを考えるよう言われたことは、救いであり、恵まれていたと思う。一方、任期中に妊娠するなんて何事だ、という声があったのも事実である。
- ・子育てをしながら議員活動するにあたり、周りが理解を示すことは重要。女性議員の活動を支えるためには、意識の変化が必要だと思う。

(ここから会場からの質疑)

(質問者)

- ・議員活動を長く続けることが出来た秘訣と支持者との関係、これからどのような活動を進めていくのか、女性議員3人に話を聞きたい。

(佐々木氏)

- ・現状を把握し、市民の生の声をしっかりと受けとめ、課題をクリアする方法を一緒になって考えることが、議員活動を20年間続けられた秘訣と思っている。
- ・支持者との関係は、まず、議員になっての誕生会を年1回開いていただいているような関係です。定期的に後援会報を、ほぼ手配りで顔を見ながら渡している。
- ・人口減少が問題になっている中、地域の活力や市民の笑顔、元気創生を議論し、地域のマンパワーやエンパワーメントを生かしながらまちづくりをしていきたい。

(池上氏)

- ・議員活動を長く続けることができているのは、支援者の存在が大きい。支援者に喜んでもらったり。お叱りを受けることもあるが、信頼していただいているからこそ、5期続けてこられたのだと思う。
- ・少子高齢化でいえば、若者の死亡原因の一位は自殺であり、その中でも、長野県は自殺率が全国で一番多い。若者や子どもたちの未来が輝けるような政策にしっかりと取

り組んでいきたいと思っている。

(今井氏)

- ・支援者や地元の方等に対し、議会の活動報告の手配や町政報告会を行っている。また、後援会組織の青年部では、4カ月に1回テーマを決めて勉強会や懇親会を行っている。期数を重ねるごとに支援者の方との距離が近くなり、信頼関係が良くなっている。
- ・人口減少や産業力の低下が町の課題となっている。何をするにも原資が必要であり、その原資をどうやって生み出していくのかということを念頭に議員活動をしている。

(質問者)

- ・女性が議員を目指しやすい環境づくりという点で、女性だけでなく若者も出てきてほしいと思う。女性や若者が議員になるとしたら、議会内に託児所を作り、子どもを預けて議会をする制度を考えたら良いと思うが、今井議員はどう思うか。

(今井氏)

- ・日曜に公務が入ると、保育園は休みのため、託児所があればいいなと思うことはある。議会内の託児所整備に公費を投入するよりも、その自治体の休日保育を充実させていく方が、地域の皆さん含め自分も利用できるようになる。議員のための制度よりも既存の制度をより充実させていくことが大事だと思っている。
- ・家族の協力がなければ議員活動は難しいと感じており、公的なサポートがあれば活動もしやすくなると思う。

(質問者)

- ・男性に丸め込まれないような強い意志を持った女性議員が出てほしいと思うが、どうか。

(谷口氏)

- ・女性がつらい立場にあった時、分かってくれるのは女性の代表かもしれない。上越市でも女性の政治家が誕生してほしいと思う。

(質問者)

- ・意識改革を進めていく中で、女性議員に潤いを求めたり、晩婚化に関して女性議員を求めるのはどうかと思う。
- ・女性議員は、子育て支援や教育、介護施策を訴えることが多いが、女性議員はそれしかないのか、と言う人もいる。本来、自分たちが目指すシステムがあれば教えていた

だきたい。

(佐々木氏)

- ・自分自身、議員活動の中で男女を意識したことはない。議会は様々な意見を戦わせながら二代表制で議決をしていくというような場であると思っている。
- ・少子高齢化や介護が問題になっている中、見附市では、縦軸でなく横軸で関係各課が連携したシステム「スマートウエルネスみつけ」という取組を行っている。課題を洗い出しながら、それぞれをリンクさせつつ制度設計をしていくことが重要だと思っている。

(最後に一言：谷口氏)

- ・今御指摘いただいたことも含めて、意識改革が先かシステム改革が先か、地域地域の人々の方々が選び取ることもかもしれない。上越市が本気で変わるのであれば、みなが驚くような改革をしてみてくださいだけでも思う。
- ・本日は、貴重なお話を聞いた。

○開会

(挨拶：杉田副議長)

- ・登壇された皆さんからは、率直で分かりやすい話をしていただいた。今日のフォーラムを受けて、一人でも多くの女性が議員に立候補していただきたい。
- ・また、ご来場の皆様からフォーラムの主旨に基づいて、それぞれの立場で支援をしていただければ。